

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 31 日現在

機関番号：32506

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530277

研究課題名（和文）「錢莊」からみた中国における「改革開放」と伝統市場の「復活」

研究課題名（英文）“Revival” of a tradition market and “Reform and Opening-up” in China seen from “Qianzhuang”

研究代表者

陳 玉雄 (HIGASHI TAMAO)

麗澤大学・経済社会総合研究センター・客員研究員

研究者番号：60458635

研究成果の概要（和文）：

中国における地域金融市場の形成に果たす前近代的な「錢莊」の役割を明らかにし、「復活」と「改革」、「開放」との相互促進の中で展開する中国経済の市場化の過程を提示した。現代中国の民間企業経営の諸側面、とりわけその企業形態、ネットワーク型ビジネスモデル及び資金調達の様子は、「錢莊」から引き継がれたものとみることができる。

研究成果の概要（英文）：

The role of premodern "Qianzhuang" (Native Bank in China) achieved to formation of the local financial market in China was clarified. Moreover, the marketization in China developed in mutual promotion of "revival" with "reform" and "opening" was shown. The Private Enterprise management is from "Qianzhang". For example, the forms of enterprise, the network type business model, and the structure of financing.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
22 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
23 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
24 年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済政策

キーワード：経済発展

## 1. 研究開始当初の背景

一般的に、中国経済の市場化は「改革開放」の結果であるとされており、「改革」と「開放」の背後にある力、すなわち新中国成立以前に民間に存在していた市場の仕組みの「復活」という問題は、これまで見逃されてきた。

1980年代から本格化する中国の経済発展は、あらゆる分野において様々な形態・レベルの市場化を随伴しながら展開してい

る。その市場化を促進する各種の要素、さらにはこれら諸要素の相互関係を解明することが重要になる。このような重要性が認識され、これまで多くの研究がなされてきた。これらの研究により、中国経済の市場化は「改革開放」の結果であるという説は半ば通説となっている。しかし、中国の民間企業の「近代的」外観から立ち入れば、「前近代的」な経営管理のあり方が現れるのである。総じて言えば、在来的な経済活

動や経済システムが「改革開放」の中で促進され、復活している。政府による制度の整備の裏には、住民、企業及びその他関係者による経済活動とその結果としてのインフォーマルシステムが先行する。「改革開放」の背後にある力、すなわち中華人民共和国が成立以前の中国社会に存在していた市場の仕組みの「復活」という問題は、実証の困難もありこれまで見逃されてきた。また、「改革」は計画経済期で成立していた「集団農業」、「国営工業」に対する生産性向上の改良から始まり、次第に流通業界、金融システムおよび労働力市場など、経済システム全般に広がっていった。「開放」も、当初技術・資本の導入のみを意図されたものの、結果的に先進国を中心とする諸外国から市場経済メカニズムの導入に結びついた。近年では、現在の中国経済システムは、資本主義的な手法を一時導入したものの、最終ゴールの社会主義あるいは共産主義に向かう途中の「社会主義市場経済」であるという議論が諸外国にも多くなっているが、市場経済が一旦導入されると、もはや逆戻りできるものではなくなった。

これまで、中国の市場化に関する研究のうち、いわゆる市場経済化のアプローチに関するもの、すなわちビッグバンないしショック療法を主張する研究と、漸進主義アプローチを提唱する研究との間に、論争が繰り広げられてきた。代表的な中国経済研究者の一人である中兼和津次氏は、「これまでの一般的な捉えかたは、中国は漸進主義を採用したから成功し、ロシアや旧東欧諸国はビッグバンのやり方であったから失敗したものである」（『中国経済発展論』、有斐閣、1999年、210頁）と総括した。しかし、両アプローチはあくまでも政府、とりわけ集権的な中央政府による「改革開放」が市場化をもたらしたことを前提に据えている。これに対して、アジア経済の代表的な研究者の一人である原洋之助氏は、中国の経済改革が「伝統的市場の復興、ないしそれへの回帰」（『現代アジア経済論』、岩波書店、2001年、51頁）であると指摘した。しかし、彼は「伝統市場の復興」の反例として国有企業改革の停滞を挙げたことにとどまり、これ以上に深く追究しなかった。そして、「伝統的市場の復興」とりわけ伝統的な金融の仕組みの復活が、現在に至るまで実証されていない。ここ2、3年報告者を含む伝統市場に関する研究が多くなっているが、あくまでも歴史学の視点から伝統的な市場の存在を追究したものであり、現在の意味「市場化」との関係が究明されていないのは現状である。

報告者は、これまでの「合会」（無尽）を中心とするインフォーマル金融に対する研

究によって、「復活」という中国経済の市場化における第三の要素を明示した。この中で、現代的イメージで語られる傾向が強い「改革」と「開放」の実像を究明しようとするものであった。もっとも「復活」を強調するあまり、それと「改革・開放」との関係という分析視覚は弱かった。

## 2. 研究の目的

本研究は、まず清朝と民国期の「錢莊」（外国為替業者と資金需給の仲介業者）の実態や衰退要因を究明した。その上に、1980年以降の「復活」過程における各利益集団の行動様式等と、それに伴う民間企業の「復活」過程および両者の内在的な関係を追究した。さらに、それらを通じて中国の市場化過程における「復活」と「改革」、「開放」という三つの要素の役割や相互関係を検討した。

「錢莊」は、古くから中国人に親しまれていた金融「合名会社」であった。金と銀と銅錢など、各地域（場合によって各階層）における異なる貨幣の両替業務から始まったものである。後に、預金、貸付、遠隔地決済、兌換券・小切手の発行など現代銀行のほとんどの業務を行っていたとされる。しかし、その「預金業務」は一般大衆を対象とせず、あくまでも関係者に限定したものであり、報告者がこれを「預け金業務」と呼ぶ。1980年代以降に「復活」した「錢莊」も、「不特定多数」を対象とする「預金」業務が政府によって禁止され続けるが、「特定なもの」を対象とする「借入金」業務が紆余屈折を経ながらも現在政府によって認められている。これらの伝統的な「錢莊」は、個人経営の零細なものを除き、その多くが日常的な業務を職業経営者の「経理」あるいは「掌櫃」に任せられ、所有と経営が分離した「先進的な経営」が行われていたとされる。また、「錢莊」の株主が無限責任を負い、長い間に人々に信用され続けていた。さらに、「上海錢業公会」に代表された業界組織によって、「手形交換所」が運営された。外資系と公設銀行の激しい競争攻勢を受けながらも、清朝と中華民国の両期における最も重要な金融機関の地位を維持し続けた。

中華人民共和国が成立してから一旦消滅し1980年代初頭に「復活」した「錢莊」は、預金と貸付業務を行うものと外国為替業務を行うものの二種類がある。その多くは、それに対する取締の報道によってその存在をはじめて世に知らせるようになったが、一時期中央銀行である中国人民銀行に「特定な地域における暫定的な存在」として認められるものもあった。これらの「復活」した「錢莊」は、政府の「基本的に禁

止」という態度もあり、その実態がほとんど明らかにされていない。

一方、日本では両替商は「発展的解消」がなされ、近代金融機関の源流の一つとなった。日本金融史研究の泰斗である石井寛治氏は、「現代日本の三大銀行について、その源流を探ってみると、いずれも多かれ少なかれ両替商に突き当たる」（『経済発展と両替商金融』、有斐閣、2007年、236頁）と指摘している。現代銀行が両替商と何らかのつながりを持っていることは、両替商から発展したものであることを必ずしも意味しないが、銀行が両替商から人材、経営技術を受け継ぐことは確かであろう。清末・中華民国期の銀行も「錢莊」との人的なつながりが、ある程度明らかにされている。これに対して、復活した「錢莊」と銀行とのつながりを見出すことが難しい。しかし、これは「錢莊」が無視できる存在だということの意味しないし、「錢莊」がフォーマルな金融機関の改革を促進したという事例が報告されている。（陳玉雄『中国のインフォーマル金融都市浄化』第3章、麗澤大学出版会、2010年3月）。民間による金融機関の設立規制がある程度緩和され、最初の「錢莊」の「復活」からすでに四半世紀が立った今、その実態と役割について明らかにされねばならない。これまでの研究は、清朝、中華民国期の「錢莊」に集中する一方、その衰退要因を当時の政府の収奪や外国の先進的な金融機関の競争に帰する。本研究は、復活した「錢莊」の実態を明らかにする一方、清朝、民国期のそれが衰退した内在的な要因を明らかにした。また、これらの諸要因が現代中国における民間の企業制度にみられる「復活」の要素を検証した。この中、「改革・開放」との相互関係という視点を念頭に置きながら、「錢莊」の「復活」が「改革開放」の中にどのように地域金融の変革を促進してきたかを検討した。

現在の中国における企業制度は、諸外国に近いものが多く導入されている。その一方、「錢莊」の代表的な形態「合夥企業」（パートナーシップ企業）なども多くの屈折を経ながら「復活」した。中華人民共和国の成立以前では、既に形式上諸外国に近い「企業形態」（狭義）が整備された一方、「合夥企業」に代表される中国独特の企業伝統が大きな役割を果たした。中華人民共和国の成立以降、一旦私的企業が完全に消滅されたにもかかわらず、伝統的な企業形態が完全に消えることはなかった。この伝統的な企業形態とその発展形態は、ネットワーク型ソーシャル・キャピタルに依拠し私企業を育み、それが政府によって追認され、以前よりも強固なものになった。これらの伝

統的な企業形態は、伝統的な農林水産業だけではなく、鉱山採掘業界、不動産開発業界および私募ファンドやベンチャー・キャピタルなどの現代的な投資産業などにも広く採用されている。

### 3. 研究の方法

「復活」したものとそれ以前のものとの内在的な関連を中心に「錢莊」の実態を明らかにするため、報告者自身による調査と資料収集・分析を展開してきた。また、現地調査と同時に、既存研究が少ない中、現地の研究者や日本における関連専門の研究者との交流も深めてきた。

本研究は、二つの側面で報告者のこれまでの研究を発展させるものである。一つは、「復活」した「錢莊」の実態を明らかにすることである。いまひとつは、「錢莊」と民間企業にみられる伝統的な企業形態との関係を究明することにある。これらを通じて、「復活」と「改革」、「開放」との相互関係を追究してきたのである。

中国のインフォーマル金融は、相互扶助的な「合会」、営利的な金融業者「錢莊」および「民間貸借」との3つに分類できる。「民間貸借」は、無数の個人（資金供給者である一方、資金需要者にもなる。また、場合によって自らが貸金業者に変身する）によって支えられている。これらのインフォーマル金融は、国中の隅々まで日常的に行われている。とりわけ、小規模経営の農家と中小企業は、フォーマル金融機関へのアクセスが難しく、インフォーマル金融に依存せざるを得ない。これらのインフォーマル金融は、古くから伝わってきたものであり、中国における変わらない本来の「民間金融」でもある。これは、現代になると「地下」に追い込まれた。中国経済は、日々大きく変化している一方、裏あるいは「地下」の動きが大きい。その現状を把握するには、常に変化と表の統計だけを追いかけるリスクが付きまといっている。本研究は、古くから存在したが、現在ではその多くが表には出ないものを、少なくとも部分的に捉えることを重要な目的の一つとする。

このため、「錢莊」の実態を明らかにする一次資料、二次資料の収集が欠かせない。日中両国を中心に多くの研究者の既存研究を活用した一方、これらの研究者との交流を積極的に行ってきた。また、報告者はこれまでも中国東南沿海部を中心に調査を重ねてきた。本研究は、現地におけるインタビューなどの調査を行いながら、「档案馆」と呼ばれる各地の資料館などを利用し、さらに関係研究者との関係を構築し交流を深めてきた。インタビューなどの調査の対象は、「錢莊」のほか、近年中国銀行業監督

管理委員会によって設立が認められた「村鎮銀行」、「貸款（貸出）公司」および「農村資金互助社」の経営者とその関係者、中国銀行業監督管理委員会・中国人民銀行の関係者を含めている。

現地調査と同時に積極的に資料収集を行う。福建省、広東省の「錢莊」が古くから米莊・布莊によって兼営され、庶民を対象に貸金業務、華僑送金業務などを行っていた。清末・民国期には、上海、天津及び漢口という三大都市（三つの点）と呼び、一つの面として「錢莊」が普及していた。そして、1980年代にも浙江省、福建省、広東省を中心に「錢莊」が復活した。しかし、三大都市、とりわけ上海の「錢莊」に関する研究がある程度蓄積されているのに対して、三省、とりわけ福建省、広東省の「錢莊」に関する研究が少ない。報告者は、これらの地域における「档案馆」（資料館）で関係資料の閲覧、複写、記録をし、資料収集に努めた。海外調査の「档案馆」等での資料収集は、可能な限り報告者自身が資料の峻別・収集を行ったものである。「档案馆」においては、規定に沿って現地の資料員に複写を依頼した。また、地方新聞・雑誌の関係報道、族譜（家系図。一族の事業内容なども記録する）の関係記録も合わせて一部収集した。

日本国内では、論文発表や学会発表、資料収集、関係研究者との交流などの研究活動を行ってきた。意外にも、清朝、民国期の「錢莊」に関する当時の日本人による研究が多い一方、中国ではなくなったが日本各地の図書館に散在される関係資料が少なくない。日本での資料収集に当たって、国会図書館、アジア経済研究所図書館、各都道府県立図書館・公文書館等を活用した。また、学術図書はもちろん、両替商系銀行の社史なども収集対象とした。最後に、日本の両替商、清末・民国期の「錢莊」と1980年代に復活した「錢莊」の異同を意識しながら、収集された資料の分析を行った。

#### 4. 研究成果

上記の研究活動の結果、日本金融学会、（日本）中国経営管理学会、日本経営実務学会を中心に、関係分野の研究者との交流を深めると同時に、研究成果の発信を行ってきた。関連テーマの研究会等に積極的に参加し、最新の研究を常に把握すると同時に、視野の拡大に努めた。また、本研究の成果を学会・研究会などで報告し、研究論文を学会誌などに投稿し、「5. 主な発表論文等」の通り掲載が認められた。

(1) これまでの「合会」を中心とする中国のインフォーマル金融に対する研究に続き、「錢莊」を中心的な機関とする、「民間

貸借」をキーワードにインフォーマル金融全体の実態を明らかにした。雑誌論文の⑤「中国の『民間貸借』」と①「中国の経済発展とインフォーマル金融」はその成果である。自然発生的な「民間貸借」は、古くから組織的な「錢莊」を生み、1980年代以降にもその「非組織性」や「特定な範囲」に限定されたことで政府によって容認された。それは、民間企業に資金を供給してきただけでなく、民間企業の生成・経営にもノウハウを提供した。

(2) ここ数年中国で起きている金融システムの実態の大きな変化とそれが実体経済、とりわけ企業経営にもたらす影響を検討した。雑誌論文②「中国における非主流金融の拡大と中小企業」はその成果である。実態的に、近年フォーマル金融とインフォーマル金融の相互参入・融合が進行している。銀行などのフォーマル金融機関は、規制を回避するためその活動の一部をオフバランスしている。一方、インフォーマル金融はリスク低減のため、フォーマル化ムードが広がっている。しかし、フォーマル金融のインフォーマル化だけでは、中小企業の資金難問題は解決されない。多様な企業に対応した、重層的な金融構造が求められる。

(3) 現在の民間企業の形態と「錢莊」などの伝統的な「企業」の形態との関連性を追究した。雑誌論文③「中国における民間企業の生成と企業形態の変化」はその成果である。中華人民共和国の成立以降、経営における「所有形態」は一旦「企業形態」を完全に駆逐した。すなわち、公的企業の独占を前提に、伝統的なものを含む企業形態を必要としなくなったのである。しかし、地域で蓄積してきたソーシャル・キャピタルに基づく企業伝統は、私企業を育み、それを政府が追認し、「企業形態」を以前より強固なものにした。それは、現在の私営・個人企業になる。

(4) 私営・個人企業のビジネスモデルから、「錢莊」的な経営方式との連続性を検討した。雑誌論文④“Business Model in Modern China and Decline of ‘Chinese Native Banking’”はその成果である。「錢莊」と「合夥企業」に共通した特徴は、株主の無限責任、「対人信用」及び血縁・地縁などに頼ることにある。すなわち、人的ネットワークに依存したビジネスモデルである。中華民国期では、中国独特の企業伝統が大きな役割を果たす一方、既に形式上諸外国に近い企業の仕組みが整備された。中華人民共和国の成立以降、伝統的なビジネスモデルが一旦消滅したが、「改革開放」を機に復活した。

本研究の全体像は、前近代的な経済活

動・組織及び市場の仕組みの「復活」という要素を明らかにし、それが現代的な「改革」、「開放」と絡み合いながら中国経済の市場化を推進していくことを究明することであり、まさに「改革」、「開放」、「復活」の三位一体的分析である。

これまで、報告者は「合会」に対する実証研究などを通じて、「復活」が中国経済の市場化に大きな役割を果たしてきたことを明らかにし、「改革」と「開放」に偏重したこれまでの研究を批判した。

日本の無尽は、頼母子講・無尽講から無尽会社、相互銀行、さらには第二地方銀行（第二地方銀行協会加盟銀行）に「解消的発展」をし続けてきた。これに対して、中国における「合会」自体は、講または個人会社（自営業）以上に発展することができなかった。この原因の一つは、政府が「改革」と「開放」、すなわち政府自身による制度設計・改革と先進的な制度の導入に固執し、中国の伝統的なものを改革すべき「遅れたもの」と見做していたことにある。しかし、現実の経済発展は、「改革」、「開放」のもとで全国的に生起している「復活」によって促進されている。「復活」と「改革」、「開放」とは相互に促進しあう関係にあり、まさに「三位一体」だといえる。「改革」なしには、預金及び貸付業務を行う「錢莊」の「復活」は難しいと考えられる。一方、「開放」なしには、外国為替業務を行う「錢莊」に対する需要が顕在化せずその「復活」はありえないといえる。だからといって、「改革」、「開放」すれば市場経済が直ちにできるわけでもない。古くから存在し、大陸中国以外の華人・華僑の世界にも引き継がれた伝統的な市場の仕組みの「復活」は、「改革」、「開放」を支える重要な要素だと報告者のこれまでの研究である程度明らかになった。「復活」を無視することはできず、むしろそれらの相互関係の究明こそ求められている。これにより中国における経済発展と市場化の特徴が明らかになる。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

- ① 陳玉雄、中国の経済発展とインフォーマル金融、東亜、査読無、No. 537、2012、36-43
- ② 陳玉雄、中国における非主流金融の拡大と中小企業、慶応義塾経済学会、査読無、『三田学会雑誌』、査読無、105 巻 3 号、2012、35-57
- ③ 陳玉雄、中国における民間企業の生成と企業形態の変化、経営実務研究、査

読有、第 5 号、2011、1-20

- ④ Chen, Yuxiong, Business Model in Modern China and Decline of "Chinese Native Banking", *Journal of Management Science*, 査読有、Vol. 2, 2011, 99-108
- ⑤ 陳玉雄、中国の「民間貸借」—インフォーマル的なパーソナルファイナンス—、パーソナルファイナンス学会年報、査読有、10 巻、2010、31-46

〔学会発表〕（計 10 件）

- ① 陳玉雄、中国の地下金融と日本企業の中国進出、第 8 回 現代中国情勢研究会（主宰：小島正憲、八重洲会議室）、2012 年 2 月 16 日
- ② 陳玉雄、中国における「民間金融」の制度化と中小企業の資金調達、慶応義塾経済学会コンファレンス（ホテルリゾビア熱海）、2012 年 7 月 7 日
- ③ 陳玉雄、近代中国「錢莊」のビジネスモデルとその衰退、日本金融学会 2012 年度秋季大会（北九州市立大学）、2012 年 9 月 16 日
- ④ 陳玉雄、住宅先物販売から見た中国の開発ビジネスモデル、日本経営実務研究学会 第 9 回全国研究発表大会（麗澤大学）、2012 年 10 月 27 日
- ⑤ 陳玉雄、ソーシャル・キャピタルの視点から見た中国の企業経営、日本経営実務研究学会 第 7 回全国研究発表大会（横浜商科大学）2011 年 6 月 11 日
- ⑥ Chen, Yuxiong, Business model and the decline of "Qianzhuang", International Conference on Business Management 2011 in Miyazaki, 29<sup>th</sup> Oct 2011
- ⑦ 陳玉雄、中国におけるインフォーマルな消費者金融とその役割、消費者金融研究会（早稲田大学 国際ビジネス研究センター）、2010 年 6 月 15 日
- ⑧ 陳玉雄、中国における金融システムの整備とインフォーマル金融の役割、日本銀行金融研究所、2010 年 7 月 5 日
- ⑨ 陳玉雄、中国式銀行「錢莊」の発展とその衰退要因、日本金融学会歴史部会（麗澤大学東京研究センター）、2010 年 7 月 17 日
- ⑩ Chen, Yuxiong, Rotating Saving and Credit Association in the southeast China, International Conference on Business Management 2010 in Hawaii, 30<sup>th</sup> Aug 2010

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

陳 玉雄 (HIGASHI TAMAO)

麗澤大学・経済社会総合研究センター・  
客員研究員  
研究者番号：60458635